



育児支援を考える～番外編3

<手記その3ー職業人として思うこと(大橋久美子の「仕事の流儀」)>

私は、紛争解決学という対人コミュニケーションや心理学を大学で教えています。その前は厚労省の研究所で医療政策の研究をしていました。多くの「ケアのプロ」と公私で出会ってきましたが、産後婦として大橋さんと接する中で「この人は本当にプロだな」と思って、結構よく頭の中で、某テレビ局の「プロフェッショナル」という番組が頭に浮かんでいましたので、その某局の番組風に、エッセイを書いてみます。ほとんど妄想ですので、以下の文章の文責はすべて、大橋先生ではなく、筆者にあります。

<大橋久美子ープロフェッショナル 仕事の流儀>

① 理想のぶれない現実主義者

産むこと、母(親)になること、いのちをはぐくむことは、限りなく深遠で豊かで深い。それを知る人は、様々なこだわりを主張することが多い。「病院でのお産はだめ。助産院いや自宅出産で『自然なお産』を」「粉ミルクはだめだ。母乳育児を」など。大橋も、助産師として、その世界の深遠さと豊かさを知り、常に理想はぶれない。しかし、大橋は、決して「理想の形やゴール(=例えば、助産院や自宅で産むこと、完全母乳など)」自体を、押し付けることはしない。理想の形やゴールをむやみに押し付けることが、むしろ結果的に理想から遠ざかることになる現実の厳しさを、時に、取り返しのつかない結果さえ産むかもしれないという恐ろしさを、大橋は知っているからだ。

大橋は助産師の経験の中で、出産や育児の豊かさも見したが、恐ろしさと厳しい現実も数多く見てきた。それから、時代の変化に対応しなければならない。高齢出産、家族環境の変化など、産み育てることの基盤が大きく変化してきた。

そんな大橋にとって、理想とは「到達点」「形」ではなく、矢印の「方向」だ。どの時代においても、今ある現実を見つめ、その現実立ち、どうやったら、今いる点から少しでも理想の「方向」に行けるのか。そのときどきの、制度、社会、はやりの学説、資源、目の前の妊婦や産後婦の健康状態や環境、という現実の中で、理想の形を押し付けるのではない。変わりゆく時代の中で、変わりゆく人間という存在に、ここから何をどう働きかけたら、理想の「方向」に近づけるのか。それがプロフェッショナル。

② すべての母を、女性を、責めない

大橋は、母になる人、母になった人に関わる時に、「これはダメ」「こうしなさい」という言い方はめったにしない。それが「理想とする方向」と違っていても、その母の行動が客観的に「ダメ」でも、いわゆる「ダメだし」をしないのだ。

大橋は知っている。すべての母はすでに精いっぱいやっていること。一見どんなにダメでも、子どもに愛を注ぎたくないと思っている母はいないことを。そして何より、その子のいのちを支えてやれるのは、その母しかいないことを。母親たちが、「ダメ出し」や「理想の押し付け」でストレスを受けたり委縮したりしても、結果的には、何もプラスの事態は起こらない。大橋は言った。「私は、この世のすべての母親を責めたくない」。すべての母たちが、今いる地点から、一歩でも前へいけるように。少しでも母としての力を発揮できるように、背中を支え、押し、助ける。それが、プロフェッショナル。

③ 技術・知識のない愛は素人。愛のない技術・知識は暴力。技術・知識に裏付けられた愛が、ケアのプロフェッショナル

産後ケアを受けたある女性はいった。「私は大橋先生に産後ケア料金を払って、結局のところ「愛」を受けている、ケアってそういうことだと感じるんです」。大橋は言う。「私たち助産師は、(ある一定の範囲では)自分の意思決定で人の体に触れることがゆるされている珍しい職種。これは他のコメディカルにはない特性です」。産後ケアで、大橋は、相談・助言以外に、クラニオの整体や、BS 法による母乳マッサージなどを行う。利用者は、体に触れられているうちに、体が緩む、変化する。すると心も緩み、ぼろっと本音の一言、弱音、深い思いが利用者から漏れる。「そこにこそ、その母の本当の問題や、解決の契機があらわれる」と大橋は考える。

大橋は、すべての知識・技術の研鑽に手抜きをしない。常に、最新の学説にも目を通す。「自分の技術を上げるために、どれだけ時間とお金をかけてきたか。元取れないわよ」と大橋は笑った。それでも、なぜ本物を目指すのか。それは高い技術に裏付けられたケアのみが、母たちに、そしてその先にいる小さいのちに、確実に愛を運ぶことができることを知っているから。そのいのちを守ることができるから。

技術と知識に裏付けられた愛を、いかに母たちに、そしてその先にいる小さいのちに届けられるか。それが助産という「医」であり「ケア」のプロフェッショナル。

④ 男っぽく見えて、女子♡ 強面に見えて、おちゃめ

仕事をする大橋は男前だ。動きやすいパンツルック、余計なことはあまり言わず、淡々と仕事をこなす。厳しい社会状況の中での産科医や小児科医不足、全国で助産師の数も減っていつている。病院で働く助産師が多い中で、開業助産院を開き、保つこと自体、ある意味では戦いだ。男前な、戦う生き方。しかし、大橋の本質、スタイルは女子だ。淡々とした仕事の合間に、おちゃめさかのぞく。そのおちゃめな一言は、ときに「おやじギャグ」であるが(笑)。

⑤ 結局大橋は、愛の人

結局大橋は、なぜ助産師を続けているのだろうか。続けてきたのだろうか。母親は無条件の愛の存在だ、と世間ではいう。しかし、本当にそうか。本当の無条件の愛は、むしろ子どもの方かもしれない。どんな親であっても、子はその親に一心に愛を求める。生きるために求めるのだ。母子の関係において、いのちと愛は表裏一体だ。いのちの誕生を助け、支える。それはすなわち、愛の仕事なのだ。

大橋は、いった。「私の愛は、私の母からきているのかもしれない」

大橋には夢がある。産後ケアセンター構想だ。全国的な産科不足や高齢出産化等の中で、すべての地域で身近に、出産のための病院や産院が確保されることは難しい。将来、出産自体は、家から離れた病院でせざる得ない時代が来るかもしれない。そうであっても、家の近くに助産師が常駐する産後ケアセンターがあり、産後ケアや母子支援を、早期に、住み慣れた地域で家族のそばで始めることができれば、どんなにいいか。しかも母子をよく知った助産師がケアできれば、どんなにいいか。市民が、人間らしくかつ安全な出産でき、母性を発揮できるように、そのために助産師が力を発揮する。そのための人材育成と仕組みづくり。

すべては、新しく生まれくるいのちのため。それが大橋のプロフェッショナル。

